

沖

4
2016

俳句雜誌[彩色]



壺中の闇

能村 研三

吟行三昧

初午の日向に供ふ裸銭

三楹の花を信じて曲がりをり

腰強き釜揚うどんけふ雨水

二月尽真つ赤な裏地翻し

三月半ば、寒暖の差の大きな頃、一週間の間に三回の吟行会があった。

三月十一日はNHK文化センター柏教室の初めての吟行会で、森岡正作さんが担当するB・Cの教室、私のA教室のメンバーに加えて、読売柏教室や沖からの参加も含めて三十二人の参加があった。朝から冷たい雨が降る日で、五年前の震災の時を思い起させるような天気であった。吟行地は上野池之端、不忍池周りで芽吹き始めた柳が雨に濡れ瑞々しく水面に下がっていた。
牡丹の芽襲の色を早見せて

清部 祥子

芽起しの雨に膨るる上野山

久梁 康子

十三、十四日は沖の同人研修会で東京の葛西臨海公園を吟行した。ここは以前東京例会で吟行したが、余程の機会がないと行かない所である。鮪の回遊で有名な水族園だが、こうした室内の施設は季語を見つけるの

草餅に耳たぶほどのくぼみあり

桃活けて壺中の闇を濃くしたり

書庫守を仕へ賜へと納雛

朧夜の一口に足る寝酒かな

摘草のところに敵ふ手足かな

文書の裁断一気亀鳴けり

に苦勞する。研修会の句会は一回目の句会が持ちより四句の当季雑詠、二回目が吟行句三句、そして三回目が私が出題の席題二句で行われた。悠然と鼻で鼾取る撞木鯨

本池美佐子
ひらひらと磯巾着の手話の華

菊地 光子

十七日は千葉俳句作家協会の役員の吟行会で、千葉市の青葉の森公園へ行った。ここは国の畜産試験場の跡地に造られた公園だが、三十数年前に当時の畜産試験場に千葉例会の吟行で行ったことがあった。こちらの方は十九名であったが、ハイレベルな句会であった。

逍遙の森に始まる鳥の恋

増成 栗人

花過ぎしもの芽吹くもの池の辺に
三枝かざを

四月の六日は俳人協会主催の「花と緑の吟行会」で府中の大國魂神社周辺を吟行する。今回は「沖」が当番幹事なので、「沖」の人たちも皆張り切っている。

蒼茫集



片 類

安居正浩

梅一輪

上谷昌憲

春空の片類に触れ観覧車
梅咲いて回覧板のまはる町
箸箱のかたかた春の音すなり
臨濟宗円覚寺派の梅の花
東京の色消してゆくぼたん雪
節分の鬼ぬませんか園メール

梅一輪ビルの反射の日が届く
恋猫の宙に路ある神楽坂
恋猫の声遠ざかる眠らねば
十六分音符ひしめく芦の角
別れ霜馬鹿ファスナーに挺摺るよ
三寒は齒科へ四温は眼科かな

固き風

田所節子

森の匂

吉田政江

富士にいただく若水の甘さかな
風神に命を貰ふいかのぼり
まだ固き風に蕊張る梅の花
料峭や浜の焚火は砂で消し
春一番やかんが笛を吹いてをり
ふつくと豆が水吸ふ雨水かな

連凧の一つを残し利根暮るる
まだ湿りある白鳥の褥あと
淡海の風に干さるる赤かぶら
日脚伸ぶ経木に森の匂して
なやらひの角の葉屋早仕舞
文字滲む北の便りや浅き春

卒業の机 辻美奈子

地祇なべて霜の大地に立ち上がる
鈍行が過ぐ待春の窓つらね
卒業の机が行儀よく残る
青空に張りついてをりいかのぼり
啓蟄の抽斗すつぽ抜けたるよ
眼鏡はげせば自由はこんなにも腫

南廻り 千田百里

寒晴やこの一瞬も星落ちて
南廻り嫌ひと降りて雪女
春はあけぼの常磐木のけぶり立ち
囀や赤子五体をもてはしやぎ
椿落つ流れに乗れば孤舟めく
花冷や近くて遠き旧職場
路の臺 森岡正作
故郷はとうに捨てたり路の臺
男みな鬚欲しく風光る
春田打つ南部牛追ひ唄歌ひ

若人に口笛我に野水仙
菜の花や解けゆく胸のわだかまり
亀鳴けり躓くはずのなきところ

マタイ受難曲 荒井千佐代

木の家の木々も息して冬銀河
マタイ受難曲終章マフラ編み上ぐる
人の死に大根を炊く賑はひよ
お降りや殉教・被爆の産土に
念力の失せなば死なむ寒九なり
一途なるものは脆しや春北風

割つて行く 林昭太郎

助手席を飛び出て狩の犬となる
百万の鉛筆うごく大試験
大寒の鉄扉をひらく指紋かな
長き長きエンドロールや外は雪
ペン皿の切手反りをり日脚伸ぶ
寒林を行く我が息を割つて行く

魚鱗明り 内山照久

寒明や魚鱗明りの魚市場
長生きとふ試練ありけり寒椿
背中でふ太陽パネル日向ぼこ
魚は氷にブラスパンドの行進来
通るたび猫ゐる出窓春隣
たんぽぽや夢語るとき空見上げ

多喜二の忌 松井志津子

人影に鴨の百羽の水走り
翔つ合図とも白鳥の啼き交す
水音の即かず離れず蕨摘む
富士見えて背もたれ正す暖房車
繋留のマスト高鳴る多喜二の忌
春昼の音なき画廊音なく去る

春の山 広渡敬雄

丸刈りとなりし少年はるいちばん
春氷尾根向うより銃の音

山ひとつ動かしてゐる山火かな
夕暮の色となる鴨春の水
暈より緑の冷たき雛の間
四股を踏む新弟子ふたり春の山

ほろ苦き物 甲州千草

寒釣の戦仕度といふがあり
白鳥に天開けて日の燦々と
ほろ苦き物はつらつと膳の春
風に日に好かるる一樹芽吹きをり
突き当るまでの坂道葱坊主
亀鳴けり蒼天一枚沼ひとつ

爪半月 細川洋子

爪半月ほのと桃色春立てり
するすると帯解くやうに凧
地虫出づ何やら子細ありさうに
靴下を脱ぎたがる児や魚は氷に
毛を刈られぬる場違ひがほの羊
塩ひとつまみ容るれば消ゆる春愁か

石・水・樹 矢崎すみ子

大寒や一刀彫の富士据ゑて
寒鰯の一連青き濤明かり
冬銀河ジャガード織の0と1
シュレツダーに十年の紙春燈
春シヨールドバイの海を越えて来し
石・水・樹ささやかに春立ちにけり

暖 冬 大畑善昭

空つ風古書店街を小半日
暖冬といふめりはりのなき日数
墓回向もんぺ長靴にて参り
一天の紺の一隅いぬふぐり
少年にかしこき金の福寿草
氷に上る魚寛解の友の文

初 氷 梅村すみを

畳み皺ほどの筋透く初氷

泣きさうな顔や日暮の雪だるま
さびしさに凍ててしまへり檻の鶴
炬燵寝の佳境を破り電話鳴る
雑言の憎めぬあいつおでん酒
沖向いて並ぶ鷗や久女の忌

如月野 久染康子

単色の風行き渡る如月野
父の忌や雪の降る降る本籍地
震災の体験を聞く寒夜かな
出湯宿の二間を仕切る板襖
口重くなる探梅の帰り道
けむり一筋待春の山裾野

女滝かも 望月晴美

女滝かも凍てていよいよ白く透き
座右の銘の「運鈍根」と年を越す
鳩亭は南南東よ恵方なり
二枚つつティッシュ出てくる冬温し

遺されて自愛のごとく小豆粥
何するも眼鏡が味方春灯

黙 読 千 田 敬

逆上りの歎び白き息太し
飛石の間合ひの芸や残り雪
豆ならぬ錠剤数へ明日は春
黙読に間合ひありけり牡丹雪
水温む水分石の出でしあと

祝・熊美氏句集末

長州砲構へる先の春の海

力足を踏む 柴崎英子

千年の杉を拝み年惜しむ
耳遠くゐて人參を甘く煮る
臘梅のほろりと解く日のかげら
荒行堂の瑞門固く閉ぢ余寒

力足を踏む待春の大地かな
初虹のふはり一山抱きけり

凧の息 宮内とし子

銭湯のギャラリーとなる春隣
探梅行いづこを向くも向ひ風
吊鮫鮓 大平洋の波の音
諦める決断薄氷踏んでから
久女忌や嫉妬はなぜか女偏
蒼天やてのひらにある凧の息

鸞 替 鈴木良戈

鸞替の混雑善人ばかりかな
探梅をかねて天神詣かな
鮫鮓を吊るしてよりの思案かな
朝陽射漸く届く良寛忌
大寒の闇厳然と夕日負ひ
木場堀を濁らし春の鯉育つ

潮鳴集



序 章 七 田 文 子

冬青空嵌めて鉄骨組み土る
耳だけが醒めをり外は雪しんしん
安曇野や春の序章は水音に
水菜しやりしやりはつきりとさせること
新調の服のタグ切る音も春

初 夢 五 十 嵐 章 子

ついたての微妙な高さ年忘れ
除夜の鐘耳をすませば異次元へ
去年今年湯船に溶けるわだかまり
新塔に雲のたなびく初景色
初夢とおもへぬ夢を見てしまふ

虎 落 笛 金 田 誠 子

一木の影真直なる寒日和
ゆるみたる吾に警笛か虎落笛
煮凝りや夜の静寂をとぢ込めて
春立つやつまみて胡麻の炒り加減
もう漕げぬふらここに過去ゆらしをり

燐 寸 峰 崎 成 規

水天宮新社殿

落慶を待てぬ桜の香や春近し
鱈酒へ昭和の焰燐寸擦る
薄氷や素心わづかに揺らす風
寒明くる玻璃は光の増幅器
浪音を拭はぬままに栄螺焼く

福 音 荒井千瑛子

冬満月較ぶるものなき孤高
福祉所の寒灯畳むごとく消え
一面の雲毛羽だてる余寒かな
福音の降るがごとくに風花す
啓蟄や数に右詰め左づめ

ぷちぷち 栗原公子

無心こそ強き力よ野水仙
寒見舞干支の切手を貼りもして
春浅し水が光となる流れ
緩衝材ぷちぷち潰す春の風邪
春は東雲珈琲はブラックで

光の小筐 佐々木よし子

江の島に鳶の高舞ふ初景色
決断のとき逃したる海鼠かな
甲斐駒ヶ岳の蒼天を統ぶ深雪晴
江ノ電は光の小筐春近し
春浅し踵赤らむ修業僧

火 高木嘉久

打楽器と思ひ夜番を愉しめり
寒 昂二等兵には星一つ
凍星や暮会所のみが点りをり
闇に吐くコンビナートの火は寒し
トンネルの向かうはつきり春遠し

工事中 七種年男

気絶してゐるかに滝の凍てにけり
羽ばたかぬやうに白菜括りけり
綿虫のプラスチックマイナス弾けあふ
水底は工事中なり蜷の道
水中を影走りくる余寒かな

英文字 井原美鳥

雪催ひ出窓に針のない時計
縦罫に縦の英文字日脚伸ぶ
翔ちさうな上枝のみくじ寒の明
易易と日付跨いで恋の猫
畑焼を遠見の個室病衣着る

沖作品



能村研三選

嫁が君この世を映す神獸鏡

市川市

藤代 康明

断崖の垂氷直槍光りして
鷹よぎる深川十万坪の空
鳩亭の水脈満つる二日かな
万歳をせし勝鬨の橋おぼろ
クリスマスコンピナートの灯のゆれて

千葉

坂本 徹

煙突は遠くにおいて冬の月
優しさは人に憂ふとおおでん酒
太箸をつかまり立ちの子に添ふる
去年今年焼海苔にる裏表
春近しぼあんと浮かぶはぐれ雲
待春や今日はここまでぬり絵して
雨樋に遊ぶ雀や日脚伸び
枝振りの豊かさ現れて春の雪
水琴窟の音の記憶や春愁

市川市

小川 流子

言ひ過ぎてこもる書齋の寒さかな
寒肥を一つかみ足す実のなる木
明日への力を溜めて冬木の芽
もてなしに長居の二月礼者かな
風花の寸秒にして宙に消ゆ

千葉

塩野谷慎吾

ジャズピアノノ烈し果てにけり
鯛焼をはふはふ女学生気分
舵取りは女神がよろし宝船
初景色遠き汽笛を入れにけり
白鳥を見てきし夜のロシアンテイ
逆さ富士乱して鴨の連なれる
触れさうで触れぬ水面の冬芽かな
恐竜の吼えたであらう寒の月
拾はずにをれぬくれなる落椿
盆梅に押し合ふ力ありにけり

千葉

竹内タカミ

市川市

小林 陽子

沖作品 15句選評

*
能村研三

断崖の垂氷直槍光りして 藤代 康明

「垂氷」は現代語の「つらら」を表す最も古い言葉である。源氏物語など古典的な文章では見かけるものの、俳句の作句例は少ない。他に「立氷（たちひ）」とか、「銀竹」などという表現もある。同人の鈴木良弼さんが「飛鳥路の崖の垂氷の蒼さかな」という句を作られているが、藤代さんも崖から落ちる水が「つらら」となっているのを見て、人も近づけない所であるから、折られることもなく、一本の真直ぐな槍のように光輝いて見えた。「直槍光り」とは作者の造語だろうが、「直槍」とは、穂先が真直ぐで枝のない槍、又は鞘をはずした抜き身の槍とある。自然の鋭さを感じる句である。

クリスマスコンピナートの灯のゆれて 坂本 徹

最近、はとバスの企画の中で工場夜景クルーズなどというツアーが流行っている。京浜工業地帯など工場エリアの夜景を船上から見学するもので、暗闇から突如現れる工場のイルミネ

ーションは、まるで宇宙ステーションのようで、とても幻想的に見える。飛行機で羽田空港に降下するとき、千葉県の市原あたりで、炎が吹き上げる煙突が見えることがあるが、ある意味でクリスマスのために作られたものではないので、余計に感動が深いものなのかも知れない。

枝振りの豊かさ現れて春の雪 小川 流子

春の雪は、北国の雪のような大降りする雪ではなく、春雨になるはずの水滴が、気温が少し低いために雪になったもので、淡く、溶けやすい。庭木の枝に降り積もるほどではなく薄らと雪を被ると、枝ぶりがむしろ見事に雪に輝いてみえる。まるで一枚の日本画を見ているような美しい景を描いた句である。

風花の寸秒にして宙に消ゆ 塩野谷慎吾

風花は天泣とも呼ぶ。空は青く日が差して空気が冷たい中、大きさも形もまちまちにきらきら落ちてくる風花は、天がこぼした涙のようだ。風花という言葉そのものに情趣がある。寸秒を宙に舞ったのち風花が消えて風だけが残っている。

ジャズピアノ 烈し 凧果てにけり 小林 陽子

私の「沖」に初投句入選した句で、〈虎落笛ひときは高く夜のジャズ〉という句があるが、この句もお洒落なフونジのバードでジャズピアノの演奏を聴いたのであるうか。ジャズピアノのミュージシャンは殆どが楽譜など見ないでの即興演奏、ジャズにはクラシック音楽などと違って「自由」のイメージがある。演奏の興奮がまだ覚めやらないで外に出たら凧も収まっていた。

〈以下略〉